連合駿台会報
No.329　平成28年9月15日発行
発行・編集　連合駿台会
発行人　広報委員長・齋藤柳光
編集人　事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052千代田区神田小川町三―二二
明治大学「紫紺館」内
電話（〇三）三二九六―四七四七
印刷　有限会社　美　創

田原総一朗　氏

連合駿台会七月例会

「時代を読む」

ジャーナリスト・評論家・ニュースキャスター

田原総一朗　氏

連合駿台会平成二十八年七月の例会を、七月二十日（水）十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、田原総一朗氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿・新会長から次のような挨拶がありました（挨拶主旨）。

六月の十六日、私は硬式野球部優勝祝賀会に参加した。優勝パレードは残念ながら小雨模様のため中止になったが、その後の祝勝会は大変盛況で、特に最後の校歌斉唱では胸が一杯になった。優勝は三十八回目を数え、完全優勝だったとはいうものの、すべての試合が二勝一敗ということで、つまりは東大にも一敗したことになる。思い起こせば、私が入学する一年前（昭和三十五年）の秋のリーグ戦で東大に二敗して勝ち点を取られ、東大五位、明治六位という屈辱的なことがあった。ところが翌三十六年の春は一変して優勝で飾り、娯楽の少なかった当時、東京六大学野球は大変人気があったので、マスコミでも「明治最下位から優勝」と大々的に報道されたことを、今でも鮮明に覚えている。優勝当日は神宮外苑前から提灯行列の後、夜は当然飲み会になったが、御茶ノ水から神田までほとんどが明大生であふれ、中には「明大生はすべてタダ！」という店も結構あり、にわか明大生になった日大・専修・中央大生も少なくなかった。今回の祝勝会では、監督が春秋連覇を目指す、と言っておられたが、本日お集まりの方々には後輩たちのために自分の思いを青春時代に戻し、神宮球場へ足を運んで応援していただきたいと思う。

本日の講師は田原総一朗先生だが、このところ国内外ともにいろいろなことが続いている。海外では六月二十三日、国民投票におけるイギリスのEU離脱決定、七月一日のバングラデシュの首都ダッカで起きた人質テロ事件、フランスでは革命記念日に昨年十一月のパリに続いてニースでも大きなテロ事件に巻き込まれ、トルコでもイスタンブール空港で自爆テロ事件が起きた。国内では七月十日

には行われた安倍政権への審判ともいうべき参院選では自民党の圧勝に終わり、今は舛添氏の辞任に続く東京都知事戦の真っ最中でもある。今日はマスコミやメディアに公開されていない裏話を窺えたらと思っている。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

＊

都知事主要三候補の抱負に対する疑問

今回の都知事選では、増田寛也さん、鳥越俊太郎さん、小池百合子さんが主要な候補と言われているようだが、三人とも都政に対する抱負とか東京都をどうしようかということは考えていないように感じられる。

増田さんは、岩手県知事と総務大臣の経験もあるが、ずっと地方活性化することを頑張ってきた人である。いかに地方を発展させるか、東京から地方に人をどう流していくか、東京をいかに寂しくするか……、ということがテーマだったわけで、そういう人が都知事になるのは、やや矛盾している。官僚出身だから頭の切り替えも早いのだろうが、やむを得ない要請で立候補することになったのではないか？　という疑問を感じてしまう。

鳥越さんは元毎日新聞社の記者でリベラル派のジャーナリストだが、立候補の理由を、先日の参院選の結果、つまり自民党と公明党、おおさか維新の会という「改憲派」が三分の二を越えたことに強い危機感を覚え、都知事選への出馬を決意したと表明している。しかし憲法改正は国政の問題であり、東京都知事が頑張っても、憲法改正には関係ないと思うので、これもよくわからない。ただこういう例は過去にもないわけではなく、一九六七年、美濃部亮吉さんが社会党と共産党の推薦を受けて都知事選に立候補した時のスローガンが「ストップ・ザ・サトウ！」だった。当時は佐藤栄作さんが内閣総理大臣で、一強他弱の安定政権であり、美濃部さんが都知事になっても、国政を止められるわけではなかったが、見事当選し、三期も知事を務めた経緯がある。これと同様、鳥越さんは「ストップ・ザ・アベ！」なのだろう。

小池さんは防衛大臣などの経験もあるが、出馬会見で、当選したらまず都議会を解散させると言っている。都議会自民党が彼女に反対しているからだろうが、都政にはあまり関心がないようだ。過去、都知事選は知名度の高い人が当選した例が多く、特に青島幸男さんあたりからその傾向が強い。当時の対立候補・石原信雄官房副長官には、自民党から社会党までが応援したのだが、青島さんが「世界都市博中止」をスローガンに掲げ当選してしまった。確かに都市博は中止になったが、それ以外の抱負らしいものは見当たらないので、半年くらいして、私は青島さんにインタビューした。その時の彼の言葉を借りると、「都知事選で限りなく一位に近い二位になりたかったのだが、当選してしまったのは想定外だった」というのだから、強い抱負がないことも当然だったのかもしれない。

今回の三人を批判するつもりはないが、彼らに比べると、途中で知事を辞めざるを得なかった猪瀬直樹さんや舛添要一さんは、都政への強い抱負や関心を持っていたと思う。そういう意味では、都政以外の問題で二人の知事が辞めたことは残念だが、今回の結果については、見守っていきたいと思っている。

どうして、いま田中角栄なのか？

いま田中角栄さんが非常にブームになっている。石原慎太郎さんが出版した『天才』は百万部近い売れ行きだが、どうしてこういう待望論的ブームが起きたのだろうか。

一九八一年、立花隆さんの「田中角栄研究――その金脈と人脈」で失脚後、私は初めてインタビューするきっかけを得て、通称「目白御殿」を訪れた。ところが約束を一時間過ぎても田中さんが現れないので、当時の秘書・早坂茂三さんに理由を尋ねると、「実は昨日、『田原総一朗に関する資料を一貫目（約三・七五キロ）集めて来い』と言われて集めたので、朝からそれを読んでいるのだ」と言う。それを聞いて、インタビューするのは私なのだから、私が彼のことを調べるならわかるが、される側がする側を懸命に調べるの

はなかなかだ……、と見直した覚えがある。

今の田中ブームは、一九六〇年代末、田中さんが「日本はこうあるべきだ！」と言ったことが、いますべて実現されているところに起因する。先ほども述べたが、六七年、革新系の美濃部さんが東京都知事に当選したが、京都府では五〇年から社共両党の推す蜷川虎三氏が連続当選、七一年には大阪府も黒田了一氏が知事に、それに神奈川や名古屋もみんな革新系で、全人口の約四〇％が革新系の首長の自治体で暮らす状態だった。田中さんはそこに危機感を持ち、「中央公論」六七年六月号に「自民党の反省」という論文を発表する。その中には、公害は産業や人口が多い太平洋側に集中しているのに対して、山間部（内陸部）や日本海側は人口が減って寂れてしまう、つまり大都市圏に人口が集中したことによる弊害が述べられ、ここのまま事態が推移すれば国民経済が根底から揺らぐ結果になるかもしれないということが書かれていた。そしてこの問題に対して自民党が善処できなければ、国民の不満が爆発して、各自治体にどんどん革新系の首長が生まれ、ついには国政をも脅かすのではないかという危機感を抱き、それに基づき「都市政策大綱」という論文を作成するのである。

これは日本全体を一つの大きな都市にしようという発想が基本になっている。当時はまだ沖縄が日本に返還されていなかったので、北海道から九州まですべてを日帰りできるような交通網に整備しようと考え、「一日交通圏、一日生活圏、一日経済圏」という言葉を作り出した。そのために日本中に高速道路と新幹線をめぐらせる、ほとんどの県に地方空港をつくる、そして日本の主たる四つの島（北海道・本州・四国・九州）をトンネルと橋で結ぶという構想だった。これが後に彼のベストセラー『日本列島改造論』の基礎となった。まだ完全とは言えないが、今の日本の姿を見れば、ほぼ田中さんの構想に近づいていることがわかる。それを六〇年代の終わりに公言して、実現させた先見性と構想力が改めて見直されているのだと思う。

しかし田中角栄と言えば金権政治の代名詞のようなもので、これを非難されて失脚するのであるが、私はそのことも尋ねてみると、彼はこう答えた。あの時は角福戦争で、ライバルの福田赳夫は東大法学部を卒業して大蔵官僚を経て政治家になったから、「福田を囲む会」というのは政財官あわて三十七もあり、ここからすべてカネが集まってくる。ところが自分の支援団体は、新潟県人会と西山小学校同窓会の二つしかなく、これではまるで勝負にならないので、自分で井戸を掘らなくてはなかなかった……と。

田中金権となるともう一つはロッキード事件だが、私のデビューは『中央公論』一九七六年七月号の「アメリカの虎の尾を踏んだ田中角栄」である。その年の二月、田中さんは五億円を受け取ったとして逮捕されていたが、私はこの成り行きに強い疑問を抱き、これは首相在任中に資源外交を展開したことでアメリカの怒りを買い、アメリカに陥れられたのだと考えたわけで、今でも冤罪だったと信じている。

話は戻るが、田中さんの構想力の強さは、普通は官僚が作成する議員立法を三十三も作ったことにも表れているが、彼は特に「六法全書」には詳しかった。この理由の第一は、吃音を直すため子どもの頃から六法全書を声を出して読んでいたこと、第二は、初当選当時、占領軍は日本を弱体化させるための法律を押し付けたが、やがて朝鮮戦争を経て東西冷戦期を迎え、日本を強くするための法律に作り直さなければならなくなったが、この両方を体験していたから法律に詳しくなった、というのが彼の言い分だった。また、田中さんほど官僚をうまく使った政治家もいなかった。記憶力に優れていたので、官僚の名前は言うまでもなく、入省年次、本人だけでなく子どもの誕生日から結婚記念日などもすべて記憶しており、欠かさず贈り物をしたというが、キャラクター的にも魅力があった。

ここにきて角栄ブームが起きているのは、

いまの政治に構想力が足りないせいだろう。アベノミクスは、第一の矢の金融政策と、第二の矢の財政政策が奏功して株価が上がったが、第三の矢である成長戦略のための構造改革は進んでいない。構造改革は改革したあとの世界をどうするのかという構想が必要なのに、そこを描き切れていない。もしいま田中角栄がいたら、何かしら新しい構想を打ち出して国民に見せていたのではないだろうか。

憲法改正はやるべきか？

自民党が結党した五五年、鳩山内閣は憲法改正を打ち出したが、以来どの内閣もこの点には触れようとしてこなかった。というのは、憲法改正をしないほうが自民党にとっても都合がよかったからだ。六〇年、日米安保条約をめぐって反対運動が激化したが、実はあの条約は、日本が他国から攻められればアメリカが守るが、アメリカが攻められても日本は関係ないという日本にとって好都合な内容であった。そのため歴代総理大臣は、安全保障はアメリカに任せて、日本の経済発展に全力投入した結果、経済は著しく成長した。しかしアメリカの本音は、日本にも自国への援助を期待したいので、警察予備隊、保安隊、自衛隊を設置させたのだ。しかしベトナム戦争時の佐藤栄作総理も、湾岸戦争時の海部俊樹総理も、アメリカの指示に基づき作成した憲法が壁になって、参戦したくてもできないと主張した。イラク戦争の時、小泉さんはブッシュ大統領との関係から支援するとは言ったものの、サマワへ自衛隊を派遣の目的は「人道復興支援」に限られた。つまり日本は、憲法九条を〝アメリカの戦争に巻き込まれない〟ためにうまく利用してきた。このことを宮澤喜一さんは「日本は自分たちで洋服を作ることは苦手だが、お仕着せの服を着こなすことは得意なんだよ」と絶妙にたとえて言っていたものだ。

ところが冷戦が終わって、米ソの対立が集結し、アメリカが世界の警察をやめると言い出したので、日本は初めて安全保障を自ら考えなくてはならなくなった。そこで安部自民党は昨年、憲法解釈を変更することで、集団的自衛権の行使を認めてしまった。しかも三分の二の勢力を獲得した現在、憲法改正も不可能ではなくなった。私は今こそ五五年以来のタブーを破って、憲法改正はやるべきだと思っている。

ただこれを行う時には、公明党だけでなく民進党の賛同も得られるような改正をしなければならない。たとえば、自衛隊を正式に認めるような条項を入れるというだけの憲法改正ならば、民進党も乗るし、国民の支持も得られるだろう。何をするかわからないという憲法改正では、国民も支持できないと思う。

【講師略歴】

田原総一朗（たはら・そういちろう）

一九三四年、滋賀県生まれ。
一九六〇年、早稲田大学卒業後、岩波映画製作所に入社。
一九六四年、東京12チャンネル（現テレビ東京）に開局とともに入社。
一九七七年にフリーに。テレビ朝日系『朝まで生テレビ！』『サンデープロジェクト』で、テレビジャーナリズムの新しい地平を拓く。
一九九八年、戦後の放送ジャーナリスト一人を選ぶ「城戸又一賞」を受賞。
現在、早稲田大学特命教授として大学院で講義をするほか、「大隈塾」塾頭も務める。
『朝まで生テレビ！』（テレビ朝日系）、『激論！クロスファイア』（BS朝日）の司会をはじめ、テレビ・ラジオの出演多数。
また、『日本の戦争』（小学館）、『塀の上を走れ　田原総一朗自伝』（講談社）、『変貌する自民党の正体』（ベスト新書）、『トットちゃんとソウくんの戦争』（共著・講談社）など、多数の著書がある

◆広報委員会からのご案内（理事会議事録）

日時：平成二十八年七月二十一日（水）十七時
場所：明治大学「紫紺館」（二F会議室）

○新入会員承認の件

高澤組織・会員増強委員長から、本日は

渡辺正三氏（藤浦産業㈱・代表取締役）、佐野公哉氏（片倉工業㈱・代表取締役社長）、塙直樹氏（㈱ハナワトランスポート・代表取締役）、兒玉康智氏（ダイコー産業㈱・取締役）、飯田和人氏（学校法人明治大学・経営企画担当常勤理事）の五名が推薦されており、委員会では全員について入会を承認した、という報告があった。これに関して、次のような質疑応答があった。

・中小企業のオーナー社長の場合、資本金三千万円という規定がある。それを、今回は二千二百万円でも認めるということだが、これが続くと、三千万円ということが無意味になってしまうような気がするが、それに関してはどう考えておられるのか。

⇓三千万円は一つのガイドラインであり、今期の方針としても入会資格の条件の中での検討を目指している。資本金は資格要件ではあるが、もう一方で会社の事業規模も考慮していいのではないかと思い、今回のケースでは現在二十七億円の事業規模ということを判断の基準とした。

・そういうことであれば、入会資格要件を変えて、問題ないところで入会を認めるほうがいいと思う。たとえば三千万円の払込資本金に満たない代わりに、売上高・利益などがどれくらいまでならいいかという、必要条件・十分条件を明記しておかないと、今後なし崩し的になってしまう恐れがあるので、そこの歯止めは必要かと思う。

⇓ご指摘はもっともなので、資本金三千万円に準ずるケースとしての年商売上なども入れた新しい入会資格要件を作成して、委員会では規約改正という形で皆様に諮らせていただきたい。会社法の改正により、資本金の額と会社の規模がリンクしていない場合も多々あるので、今回は〝理事会の賛同が得られれば〟という条件付きで、入会を認めていただけたらと思う。

・今回はオーナー企業のケースだが、今までも上場企業や士業の場合もそれぞれに基準を設けて委員会等が検討し、理事会で承認してきた経緯があると思うので、今回のケースも前例に準じて理事会で判断すれば問題ないのではないかと思う。

結果、今後も検討していくことを前提にして、大多数に異議なく承認された。

○各委員長より報告事項

各委員会から、順次報告があった

〈総務・事業委員会　河村委員長〉

本年度、総務・事業委員会は九名から十名に増員、副委員長も二名から三名の体制となり、年間の各種事業の充実を図っていくつもりである。具体的には年六回の例会のうち四回は講師を選定して講演を実施、また今年度から九月例会も従来の昼例会から夜例会に変更した。その他、従前より行っていたバス旅行等の親睦会、ゴルフコンペ、新入会員向けの情報提供を踏まえたビジネス勉強会や新入会員歓迎会、さらに組織・会員増強委員会所管の若手の会も当委員会が引き継ぐようになった。若手の会に関しては名称の変更も含め、他の事業のもスケジュール化・具体化を急いで、早めにご案内をしたいと思っている。

〈組織・会員増強委員会　髙澤委員長〉

組織・会員増強委員会は十名のうち五名が新しく替わったが、一番の役割は、連合駿台会の良質な会員の拡大になると思うので、先ほどの新入会員の入会資格要件の基準については、改めるところは皆様に諮りながら進めていきたいと思う。また、身近な方で推薦するに相応しいと思う方がおられたら、私もしくは事務局にご連絡いただけたらと思う。

〈広報委員会　齋藤委員長〉

広報委員会は、今期から全委員のうち三名が平成卒業ということになり、新しい広報委員会として皆様にご協力をお願いしたい。ということで、本年度は「Eメール元年」と位置づけ、希望される方には、例会のご案内もメールでお送りしていきたいと思う。また、当会の案内パンフレットやホームページ

も早急に刷新しなければならないので、若手のパワーに頑張ってもらい取り組んでいる最中である。外部にPRするツールとして大いに利用していただくため、なるべく早く新しいものをご提供できればと思っている。

〈大学支援委員会　浅井委員長〉

大学支援委員会は、三名が入れ替わり、総勢九名で運営させていただく。現在進んでいる事業内容については以下の五件がある。①学術賞・学術奨励賞の件は、大学の組織変更に伴い所轄の研究推進部長も新しくなられたので、応募論文数の増大、およびその策をどうするかを兼ねて打ち合せを実施、積極的にアピール策を相談している。ちなみに、学術賞の授賞式と懇話会（駿台懇話会）は来年一月十八日（水）が仮決定している。②寄附講座に関しては、春季寄付講座（六月一日実施）は㈱アトレの三輪美恵常務に講演をお願いしたが、当日参加者百七十二名のうち七割が女性という盛況ぶりだった。秋期寄附講座は、当会の地方会員で㈱チュチュアンナの上田利昭社長（昭和四十三年法卒）に決定し、十一月初旬頃に開催する。③フューチャースキル養成講座は、支援企業七社の各テーマの最終発表が先週終わったが、七月後半の終了後に反省会を開き、他学部（現在は商学部と経営学部）への展開等につき打ち合せを行う予定。④留学生支援は、今年度より「交換留学生」の修了式時に記念品を贈呈する予定。記念品はキャンパスメイトからのアンケートで人気の高かったステンレス製ペットボトルで、七月二十九日の春季修了式には田村会長も出席。⑤ホームカミングデー、御茶ノ水ＪＡＺＺ祭、シェイクスピアプロジェクトの協賛については、予算化もされており、昨年度同様の協賛を予定している。

〈財務委員会　徳丸副委員長〉

※坂田委員長欠席のため

七月十三日開催の財務委員会で討議したことを二点ほど報告させていただく。まず、現在の年会費の納入者は二百三名、八百四十万円ほどとなっている。例年九三％くらいの達成が見込まれるので、あと五十名ほどの入金は見込めると思う。また今まで再請求は十月の初め頃に行っていたが、財政基盤を確実にするために、今年は九月初旬に、「九月末日まで」と明記した再請求書を発送する予定である。もう一点は、大学支援の方法と当会のあり方を考えた上で、一三〇周年の時は一千万円を寄附したが、今後も五年毎くらいには寄付できるように基金をプールしたらいいのではないか……、ということになったが、これは会長をはじめ理事の皆様方とのご相談で決めていきたい。先日発売された東洋経済によると、明治大学は人数の割には寄付が少ないとのことなので、何とか頑張って寄附することを財務委員会でも考えているので、皆様のご協力をお願いしたい。

以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。

（敬称略）

小林（こばやし）　稔（みのる）
昭和五十七年・商学部卒
いちよし証券㈱
取締役代表執行役社長
東京都中央区在住

常泉（つねいずみ）　邦彦（くにひこ）
昭和四十九年・工学部卒
前米国東京計器㈱CEO・
取締役社長
神奈川県大和市在住

草木（くさき）　頼幸（よりゆき）
昭和五十五年・商学部卒
㈱大和総研ホールディングス
代表取締役社長
東京都八王子市在住

渡辺（わたなべ）　正三（しょうぞう）
昭和四十四年・経営学部卒
藤浦産業㈱・代表取締役
大阪府守口市在住

佐野（さの） 公哉（きみや）
昭和五十二年・農学部卒
片倉工業㈱・代表取締役社長
東京都北区在住

塙（はなわ） 直樹（なおき）
昭和五十年・法学部卒
㈱ハナワトランスポート
代表取締役
東京都江東区在住

兒玉（こだま） 康智（やすとも）
平成十八年・政経学部卒
ダイコー㈱・取締役
東京都港区在住

飯田（いいだ） 和人（かずと）
昭和四十六年・商学部卒
学校法人明治大学
経営企画担当常勤理事
千葉県船橋市在住

◆明大ニュース

●リオデジャネイロ五輪 明大アスリートが大活躍

八月五日～二十一日の期間、熱戦が繰り広げられた第三十一回オリンピック競技大会（二〇一六／リオデジャネイロ）。日本は史上最多となる四十一個のメダル（金12銀8銅21）を獲得するなど、連日盛り上がりを見せた。明大関係者も十人の選手が出場。世界を舞台に躍動した。

卓球・男子団体では、水谷隼選手（二〇一三年政経卒）と丹羽孝希選手（政経4）が出場。準々決勝で香港、準決勝でドイツを破り決勝に進出し、世界ランキング一位・三位・四位の三人で構成された強豪・中国と対戦。水谷選手が勝利するなど健闘するも1―3で敗れ、銀メダルを獲得した。また、男子シングルスでは、水谷選手が銅メダルを獲得。丹羽選手は、準々決勝で敗れ、五位入賞となった。卓球の男子団体・シングルスにおけるメダル獲得は日本初の快挙で、水谷選手、丹羽選手、監督を務めた倉嶋洋介氏（一九九九年経営卒）ら明大勢が大きく貢献した。

柔道では、海老沼匡選手（二〇一二年商卒）が男子66kg級に出場した。準々決勝まで一本勝ちで駒を進めたが、準決勝ではゴールデンスコア方式の延長戦の末、韓国選手に有効を奪われて敗戦。気持ちを切り替え臨んだ三位決定戦では、一本勝ちを収め、前回のロンドン大会に続き二大会連続で銅メダルを獲得。

水泳・男子オープンウォーターズイミング（10kmマラソン）に出場した平井康翔選手（二〇一三年政経卒）は、一～十一位までの選手が五秒以内に入る接戦の中、八位入賞を果たした。

●進学ブランド力調査「志願したい大学」 明大が関東エリアで八年連続一位

リクルート進学総研が七月十四日に発表した「進学ブランド力調査二〇一六」の関東エリア「志願したい大学」ランキングで、明治大学が八年連続で一位を獲得した。

この調査は、リクルート進学総研が高校三年生の大学に対する志願度、知名度、イメージを把握することを目的に、関東・東海・関西から七万四千人の高校三年生を対象にアンケート調査を実施。約九千人の回答を得て結果を集計した。二〇〇八年から毎年実施し、今年で九回目となる。

●受験生が明治大学を体感 二〇一六オープンキャンパス

明治大学の各キャンパスを受験生らに開放し、大学生活の一端に触れてもらう真夏の恒例行事「オープンキャンパス」が八月の計七日間、駿河台・生田・中野の三キャンパスで開催された。多数の高校生やその保護者らが大学を訪れ、各キャンパスはにぎわいを見せた。

●国家公務員総合職試験 明大から二十七人が合格

人事院は七月二十九日、中央省庁の幹部候補を目指す国家公務員採用総合職試験の二

○一六年度最終合格者を発表。明治大学からは二十七人（前年度二十二人）が合格した。うち女子は五人（同四人）。

明大の合格者の試験区分別内訳は、院卒者試験で「行政」二人、「人間科学」一人、「農業科学・水産」二人（うち女子一人）の計五人。大卒程度試験で「政治・国際」一人（うち女子一人）、「法律」十一人（うち女子一人）、「経済」六人（うち女子一人）、「工学」一人、「農業科学・水産」二人（うち女子一人）、「農業農村工学」一人の計二十二人だった。

二〇一六年度試験の申込者数は二万千八百八十三人（前年度比百一人増）、合格者数は二千十一人（同二百八十五人増）で、倍率は一〇・九倍（同一・七ポイント減）。女子の合格者数は過去最高の五百十二人（同百十七人増）となった。出身学校別の合格者数内訳では、国公立大学千五百十九人、私立大学四百八十人、その他（外国の大学等）十二人。合格者の出身学校数は全体で百二十七校、十人以上の合格者を出した大学は三十三校だった。

●「戦没学徒忠霊殿」慰霊祭
柳谷理事長が初参拝

明治大学の戦没学徒の御霊を慰め鎮める忠霊殿慰霊祭が七月十日、新潟縣護國神社（新潟市中央区）にて厳かに執り行われ、柳谷孝理事長、長吉泉顧問、向殿政男校友会長、校友会新潟県支部の高橋淑浩支部長をはじめ関係者約五十人が参列した。

「明治大学戦没学徒忠霊殿」は、学業の道半ばにして学徒出陣などで戦死した明大生の戦没者を祀る霊廟。戦時中は駿河台校舎の旧図書館内に安置されていたが、新潟県出身校友の尽力により、一九五〇年に新潟縣護國神社に移された。

●震災復興支援センター益城町を訪問
町長と意見交換も

明治大学震災復興支援センターの竹本田持センター長（社会連携担当副学長、社会連携機構長）は七月二十日、熊本県益城町を訪問し、校友会熊本県支部の高宮宏支部長らとともに、益城町の西村博則町長と面会した。今回の訪問は、七月十五日に益城町立木山中学校の生徒を対象に実施した折紙工学「夢講義」に続く、震災復興支援事業の進め方について、意見交換、協議をするためのもの。

竹本センター長は、東日本大震災における被災地および被災者支援の経験を踏まえながら、本学のこれまでの取り組みを説明。熊本地震で大きな被害を受けた益城町の子どもたちに対し、地元大学の支援事業との棲み分けを図りながら、校友会熊本県支部とも協力した支援体制の方針を伝えた。今後の具体的な支援事業については、町内関係者と協議をしながら進めて行くこととなる。

●OB社長

▽スルガ銀行（銀行業・東証一部）＝米山明広氏（一九八九年工学部卒・五十歳）

▽ベイシア（小売業）＝橋本浩英氏（一九八四年政経学部卒・五十五歳）

●大学間交流
順天堂大との連携事業が始動

明治大学は昨年十二月、順天堂大学と教育・研究活動の交流と連携の推進を目的とした大学間交流に関する「包括協定」を締結した。以後、図書館の相互利用をはじめ複数の分野で、連携事業の具体化に向けた取り組みが始まっている。

●世界に広がる協定校
四十七ヵ国・地域 二百八十六大学と協定

明治大学は、新たに海外の一大学と大学間協力協定を締結した。協定校はこれで四十七の国と地域、二百八十六大学となった。（七月十三日現在）

●政治経済学部
VIBEプログラム（四大学連携）
明大生が豪大使館で観光誘致策を提案

明治大学政経学部が、桜美林大学、ロッ

テルダム応用化学大学（オランダ）、東フィンランド大学（フィンランド）と共に取り組む、国際インターンシップ付協定留学プログラム（ＶＩＢＥプログラム）の成果報告会が七月十三日、オランダ大使館（東京都港区）で開催された。

第二回の留学生受け入れが七月末に終了するのを受け企画された今回の成果報告会は、欧州二大学から明大に留学中の留学生八人と、政経学部、経営学部の学生六人で構成された明大グループと、桜美林大グループがそれぞれ発表した。明大グループは、五月下旬に栃木県益子町において実施したインターンシップのテーマ、「欧州での益子の酒、陶器の販売促進」「欧州の観光客・ビジネス客の益子への誘致」についてプレゼンテーション。地元の観光産業や益子町役場、観光協会などを訪れ調査してきた成果を踏まえ、学生、留学生の視点から考えた観光誘致策を大使館関係者らに対し提案した。一方、桜美林大グループは、「墨田区への外国人観光客誘致」をテーマに、観光地としての墨田区の魅力や、課題解決策について発表した。

●広報戦略本部　マスコミ交流会
「トランプvsクリントン～米国大統領選を斬る！～」を開催

広報戦略本部（本部長＝飯田和人経営企画常勤理事）は七月八日、第二十三回マスコミ交流会を駿河台キャンパス・グローバルフロントで開催。この交流会は、本学関係者とマスコミ関係者の交流や情報交換を目的として二〇〇七年に開始。これまでも明治大学の最新の研究成果や旬な話題を取り上げてきた。

今回は、十一月に行われる米国大統領選挙をテーマに「トランプvs.クリントン～米国大統領選を斬る！～」と題した基調講演とパネルディスカッションを実施。学生や一般参加者を含む約百二十人が熱心に耳を傾けた。

第一部では、異文化間コミュニケーション論が専門で、米国大統領選挙にも詳しい海野素央政治経済学部教授による基調講演が行われた。海野教授は、二〇一五年の夏から研究の一環としてクリントン陣営の選挙運動に参加しており、自身の体験や研究成果を踏まえ、最新の動向を鋭く解説した。

続くパネルディスカッションでは、海野教授に加え、米国の政治外交に精通した沢井俊光氏（共同通信社外信部長）、足立正彦氏（住友商事グローバルリサーチシニアアナリスト）が登壇。「トランプ氏はサービス精神旺盛。この先もどういった選挙戦をしていくか予測不可能」（沢井氏）、「この百年を振り返っても、今までなかったような事態が起こっている」（足立氏）と、今後の選挙の展望や日本との関わりについて、刺激的な議論が交わされた。

●理工学研究科建築学専攻
国際シンポジウム「グローバル社会における地域再生の意味」

大学院理工学研究科建築学専攻国際プロフェッショナルコース（ＩｰＡＵＤ）は七月二十六日、国際シンポジウム「グローバル社会における地域再生の意味」を中野キャンパス・五階ホールで開催した。

このシンポジウムは、ＩｰＡＵＤとハーバード大学大学院デザイン学部が、都内の建築系の大学院生とともに特定地区の問題点に着目し、新旧文化を織り交ぜた将来のビジョンを提案する協働型ワークショップ、「ハーバード大学大学院デザイン学部夏期ワークショップ二〇一六」（七月二十五日～三十日）の関連イベントとして企画されたもの。

当日は、ハーバード大学建築実践コース准教授のマーク・マリガン氏による「国際的な建築・都市デザインとハーバード大学の建築・都市デザインの教育方法」をテーマにした基調講演でスタート。マリガン氏は日本での実務経験や、世界的建築家・丹下健三氏の建築プロセスを学ぶ学生、同大学院デザイン学部における授業内容について紹介した。

●法学部
十四カ国・二十四人の留学生が日本の法制度を学ぶ

法学部は、日本の法と法制度について英語で学ぶ、外国人向け夏期短期留学プログラム「Law in Japan Program」を、七月二十七日～八月九日に開講した。

今年で八回目の開催となる本プログラムには、十四ヵ国（オーストラリア、ブラジル、中国、フィリピン、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、イタリア、ネパール、ポーランド、スリランカ、スイス、アメリカ）から過去最高の二十四人が参加。なかでもアジア各国からの参加者が増加傾向にあり、フィリピン、スリランカ、ネパールからは初の参加者を迎え、また弁護士など法律専門家として活躍している社会人六人も参加した。

本プログラムは、講義とフィールドトリップで構成され、法律知識のない参加者でも日本の法と法制度が理解できるよう考慮されている。講義では、憲法、司法制度、刑事法、民事法、家族法、知的財産法、租税法、国際法、競争法、労働法、法曹制度、法とＩＴ、法とビジネスなど多彩な分野を幅広く取り上げ、受講者は母国と日本の法制度を比較しながら活発に意見を交わした。

●春学期「交換留学生修了式」
百四十三人の留学生が学びを終える

明治大学での交換留学プログラムを春学期で修了する外国人留学生の「交換留学生修了式」が七月二十九日、駿河台キャンパス・グローバルフロントで行われ、一学期間または一年間在籍した各国からの留学生が出席した。

この交換留学プログラムは、明治大学と海外の大学間または学部・研究科間での協定に基づき相互に留学ができる制度で、協定校の数は三十六ヵ国・地域百九十大学（二〇一六年三月現在）に広がっている。修了式は毎学期末に開催され、今回は百四十三人が対象となった。

●リバティアカデミー　坂東玉三郎講演会
―演じるということ二〇一六―

明治大学リバティアカデミーは七月二十五日、歌舞伎俳優で重要無形文化財保持者（人間国宝）の坂東玉三郎さんを迎え、公開講座「坂東玉三郎講演会―演じるということ二〇一六―」を駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催。学生をはじめ玉三郎ファンら約千人で会場は埋め尽くされた。

今年で五回目となる講演会の第一部では、能をはじめ日本の古典芸能に造詣が深い土屋恵一郎学長と玉三郎さんが対談。玉三郎さんの舞台を五十年以上観てきたという土屋学長は、「玉三郎さんを語る上で〝美しさ〟は最たる要素」と、歌舞伎界を代表する女形である同氏の魅力に迫った。玉三郎さんは、「美の基準はあいまいなもの。美しくあらねばということだけに終始したことはない」としながらも、幼い頃の生い立ちから、歌舞伎の世界で女形を演じるまでの経緯などについて紹介。ほかにも、中国・北京での公演エピソードや古今東西の美意識、『桜姫東文章』や『京鹿子娘道成寺』といった舞台の裏話などを披露しながら〝美しさ〟について語り合った。

●就職キャリア支援
「優良中堅企業」探し方セミナー

名前を聞いたことがある企業や大手企業など、安易なアプローチになりがちな学生の就職活動。こうした傾向を解消しようと、明治大学就職キャリア支援センターは六～七月の三日間、「キラリと光る、優良企業に出会う」と題したセミナーを駿河台キャンパスで開催した。

日本の全企業の九割以上が中小企業という状況を鑑み、講演や説明会をとおして多様な業種や企業に触れることで、学生の視野を広げる機会を提供することが同セミナーの目的。二〇一七年三月卒業・修了予定者を対象に行われた。

●校友会

二〇一六年度　定時代議員総会を開催

明治大学校友会（会長＝向殿政男名誉教授）は七月三十一日、駿河台キャンパス・リバティホールで二〇一六年度の定時代議員総会を開催した。代議員総会は校友会の会則が定める重要事項を審議・決定する会議で、当日は代議員総数六百三人中、委任状を含め五百十六人が出席。大学からは来賓として、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長をはじめ役員が出席した。

総会は、物故校友への黙とうを捧げた後、徳丸平太郎副会長の開会の辞でスタート。国歌を斉唱し、大学および校友会役員が紹介された。

村山富市名誉会長のあいさつに続き登壇した向殿会長は、梅雨明けの猛暑にもかかわらず、全国および韓国・台湾から大勢の代議員が参集したことへの謝辞を述べた上で、「最近再会した教え子が、『明治大学は私の誇りだ』と言ってくれた。これは、教育研究に携わった教職員、学生や父母、そして、それを支えた校友の皆さんの努力の結実だ」と、〝明治はひとつ〟のスローガンをあらためて力説。また、世界中の校友をつなぐ「紫紺NET」や、地方出身学生を支援する「つなげ！紫紺の〝たすき〟」奨学金など、さまざまな取り組みを紹介した上で、「少子化やグローバル化など時代の変化とともに、母校へのさらなる支援が必要」と校友会教育・研究振興基金創設に関わる慎重な審議を依頼した。さらに、「母校にどういう恩返しができるか、皆さんと心をひとつにして取り組んでいきたい」と、七年目を迎える校友会長としての意気込みを示した。

●拳法部

三年ぶりの全国選抜優勝

体育会拳法部は七月三日、第二十九回全国大学選抜選手権大会（日本大学文理学部百周年記念館）で三年ぶりの優勝を果たした。

同大会二連覇中で昨年敗れた立命館大学との決勝戦は、先鋒の百合草春男選手（文3）が先勝を決めるも、そこから試合は2―2の同点に。大将戦でも決着つかず、試合は代表者戦までもつれこんだが、主将・原田優介選手（法4）が面突きで二本勝ちを決めた。

●体育会サッカー部

接戦制し、総理大臣杯初優勝

体育会サッカー部は八月十四日、ヤンマースタジアム長居（大阪市）で行われた「第四十回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」決勝で、順天堂大と対戦。前半に道渕諒平選手（農4）が挙げた得点を守りきり、1―0で初優勝を果たした。

この大会は、地域別に予選を勝ち抜いた三十二チームがトーナメント方式で対戦する夏の全国大会。サッカー部は六～七月に関東予選として行われた第五回関東大学サッカートーナメント大会を三位で終え、関東代表として出場していた（二年連続十三回目）。

これまで出場した総理大臣杯では、二〇一三年と一五年に決勝まで進出したものの惜しくも敗戦。今大会では、二回戦でアディショナルタイムから同点に追いつきPK勝ち、準決勝では後半に追いつき逆転するなど、接戦を制して、三回目の決勝進出で初優勝を成し遂げた。

●日米大学野球

柳主将がMVP＆最優秀投手に輝く

大学野球の日米対抗戦である「第四十回日米大学野球選手権大会」が七月十二～十七日、明治神宮球場など三球場で開催され、体育会硬式野球部監督の善波達也団長率いる日本代表が通算三勝二敗で、昨年に続けて十八度目の優勝を決めた。最高殊勲選手賞（MVP）と最優秀投手賞には、第二戦と最終戦で二勝に貢献した主将の柳裕也投手（政経4）が輝いた。

今回の大学日本代表には、明大から柳投手、齊藤大将投手（政経3）、牛島将太捕手（経営4）の三選手が選抜された。

◆駿台トピックス

●山田会員に記念品を授与

二〇一五年度の日本芸術院賞を受賞された山田朝彦氏に、田村会長から記念品が授与されました。（写真は挨拶する山田氏）。受賞作の「朝の響き」は、会報三二七号に掲載。

●山口前会長に花束贈呈

三期・六年に渡って当会会長を務められ、五月の総会で勇退されました山口政廣前会長に、感謝の意を込めて花束を贈呈いたしました。本当にご苦労様でございました。

◆七月例会出席者

青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、圷昭二、安達明正、阿部了、同ご友人、阿部倫明、有賀隆治、飯塚佳央、池田勝也、石川かおり、同ご令嬢、石川均、石橋良一、石原道勝、石原裕司、伊東正博、同ご友人、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、梅津章、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、岡本満夫、小山哲郎、笠井正弘、勝俣正義、栢森靖、河合秀二郎、河村博、沓掛英二、栗原権右衛門、小島清治、兒玉康資（代理）、小濱雅説、小林一光、五味道雄、小山修、根田哲雄、根田吉雄、斉藤春夫、齋藤柳光、坂本孝行、笹田学、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、眞田瞳、椎名茂樹、志田憲彦、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、同ご友人、鈴木紀行、関孝夫、関根均、瀬戸正道、相臺志浩、園田英次、高澤徹、武内裕、竹下衛司、武田宣夫、田代恭一、舘林精二郎、谷原誠、田村駿、常泉邦彦、天童美徳、同ご友人、当山明彦、徳丸平太郎、冨井征也、富水流孝二、中川敏洋、長瀬幸泰、中村豊、長吉泉、並木洋一、西﨑誠次郎、西山武夫、野口昌宏、橋口隆二、長谷川進一、同ご友人、塙英幸、馬場範夫、原田榮、平川清、廣渡眞（代理）、福田和彦、堀越孝、前川一郎、同ご友人、眞壁八郎、松崎優子、摩尼和夫、水江博、向井眞一、向殿政男、向山勝、村岡健、室井恵明、森一朗、柳谷孝、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山路英夫、山田朝彦、山田勝、山田幸夫、弓野理恵、吉田光一郎、渡邊洋三

【編集後記】

世界中に感動と興奮を与えてくれた南米大陸初の五輪がブラジル第二の都市リオデジャネイロ市で開催された。私はリオには過去二度出張したことがあり、コルコバード丘の両手を開いたキリスト像の迫力感、コパカバーナ海岸の砂浜のあちこちでは子供たちが裸足でサッカーをしている姿、ファベーラという貧民街では電気代も払えず、住民は道路の公共電柱の線から電線を各家に引っ張って無料の電気で生活し、治安の悪い環境など、いろいろな光景を想い出します。

皆さんも猛暑の中、毎日寝不足気味で日本選手団の活躍に感動し応援されたことでしょう。結果は金メダル十二個を含む史上最多の四十一個のメダルを獲得したし、入賞総数八十八も過去最高のようで四年後の東京五輪も大きな期待ができそうです。相変わらずメダルを量産するのは「御四家」の柔道・水泳・体操・レスリングでしたが、今回はバトミントン、テニス、陸上男子四百メートルリレーが躍進し、特に卓球においては明大ＯＢ・水谷君、四年生・丹羽君の大活躍で女子団体戦共々感動をもらいました。特に今回は日本選手達が日の丸を背負って戦っている姿を見て私自身「大変涙もろくなった」ことを強く感じた十七日間でした。

陸上の絶対王者ボルトも脱帽した日本の団体戦でのチーム力の強さを見て、単なる技量や根性だけでなく農耕民族として先祖から日本人が本来持っている勤勉・忍耐・協調・礼節といったＤＮＡが備わっていて全体のチーム力を創っていると思いました。また、今どきの若者はプレッシャーを楽しみや他で粉らわせて、プラスにする人間が多く育ってきたことも感じた次第です。

閉会式で小池知事が五輪旗を受け、スタジアムに描かれた〝ＳＥＥ ＹＯＵ ＩＮ ＴＯＫＹＯ〟の文字に四年後の責任と期待は膨らむばかりです。

ただいま熱戦中のパラリンピックの日本選手団の活躍を応援しましょう！　オブリガード!!（多謝!!）

（有賀　隆治）